

地域の論理：「スーダン」における人々の営みを巡って



目的：50年以上にわたった内戦を経て、2011年に南スーダン独立という歴史的転換点を迎えた「スーダン」(現スーダン共和国、南スーダン共和国領域)を事例として、地域、そして地域固有の論理がいかに形成されていくのかを、「スーダン」の各地域で調査を行ってきた若手研究者の発表を通して見て行くこと。

プログラム：北から南へ

- 発表者1. The Dynamics of Political Mobilization Strategies in North Sudan: Examining the Impact of the Independence of South Sudan,
モハマド・アブディン、東京外国語大学大学院博士後期課程
- 発表者2. スーフイズムにおける包括性と排他性：タリーカ(スーフィー教団)にみる共同性と「スーダン」
丸山大介、京都大学大学院博士後期課程
- 発表者3. 「スーダン」に生きる：移住者地区における人々の「移住」と「帰還」、そしてその後
飛内悠子、上智大学大学院博士後期課程
- 発表者4. ジュバ民衆史に関する予備的報告：「脱部族化」した都市の過去と現在
仲尾周一郎、京都大学大学院博士後期課程
- 発表者5. 「トライブ」をめぐる想像力：2011-2012年'Jonglei Crisis'における武力衝突、外部介入、スピリチュアル・リーダー
橋本栄莉、一橋大学大学院博士後期課程
- 総合討論
- コメント. 「スーダン」をめぐる交渉、競合、葛藤：ポスト内戦国における暴力の再歴史化、再政治化にむけて
内藤直樹、徳島大学大学院准教授

紡ぎだされた論点

- 「スーダン」におけるイスラームと政治の関わり
- 見出される「トライブ」
- 南スーダン独立後の人々の動き
- 東アフリカから「スーダン」をつなぐ人々の存在と「都市」ジュバ

コメント

南スーダンの独立が果たされた「スーダン」における「生存者の正義」はいかにして可能だろうか？それは、①歴史的な文脈の理解、②新たな政治的コミュニティの想像/創造、③民主化の実現に向けた国家の改革によってなされるのではない。この点を踏まえ、各発表者に北部スーダンの政教分離や民主化が人々の日常といかに関わるのか？、ハルツームへの移住は単線的なものなのか？、難民都市としてのジュバの意味、「トライブ」と同様に「スーダン」をめぐる想像力も働くのではないかと質問、コメントがなされた。

総合討論

- 「スーダン」という国家の成り立ち・・・植民地化との関わり
- 「スーダン」におけるtribe、もしくはethnic groupのあり方、その普遍性と特殊性
- 「アラブ」という単語の意味の変遷、人々の視点の違い
- 南と北、だけではなく東と西という視点も必要であること

課題

- 政治と人々の日常の関わりとあり方
- 現代「スーダン」における「アラブ」の意味とその形成過程